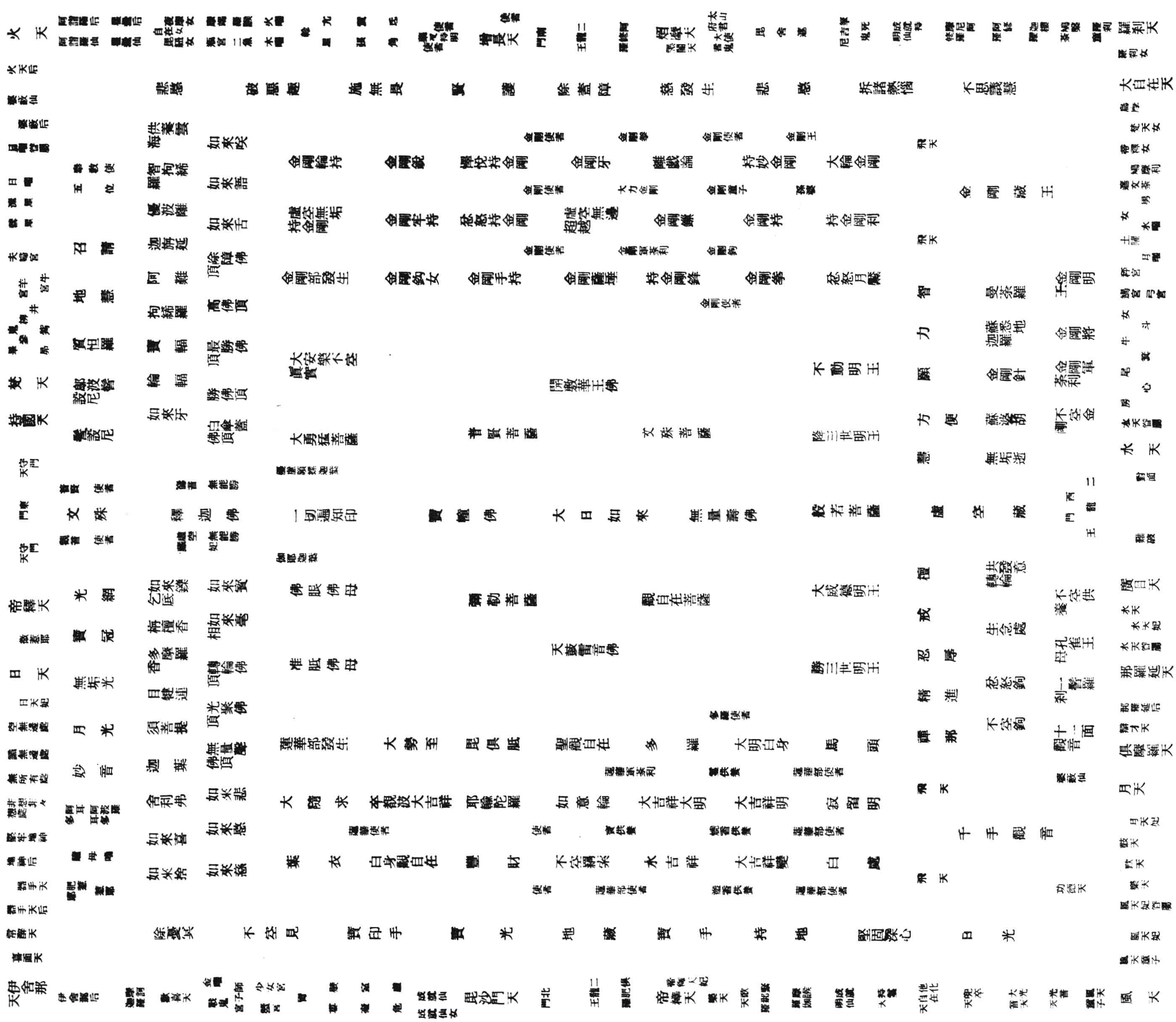
3 シハ・タ

新版 增訂

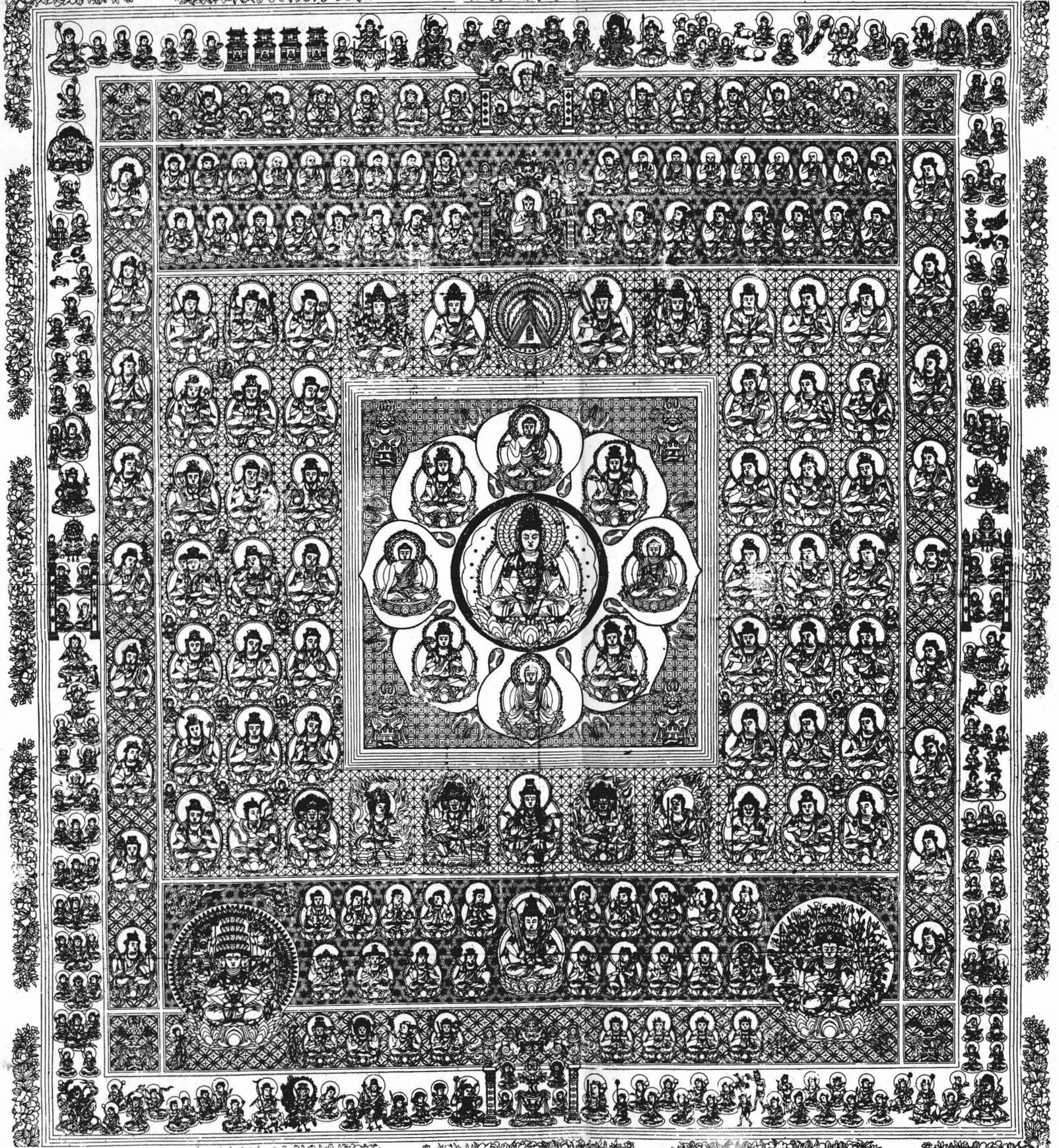
密山教士大辭典

印影

胎藏曼荼羅（長谷寺版）



大日如來
寶幢佛
開敷華王佛
無量壽佛
天鼓雷音佛
普賢菩薩
文殊菩薩
觀自在菩薩
彌勒菩薩
一切遍知印
般若菩薩
不動明王
虛空藏
千手觀音
釋迦佛
文殊
火天



命運線

命運線

命運線

命運線

命運線

命運線

命運線

命運線

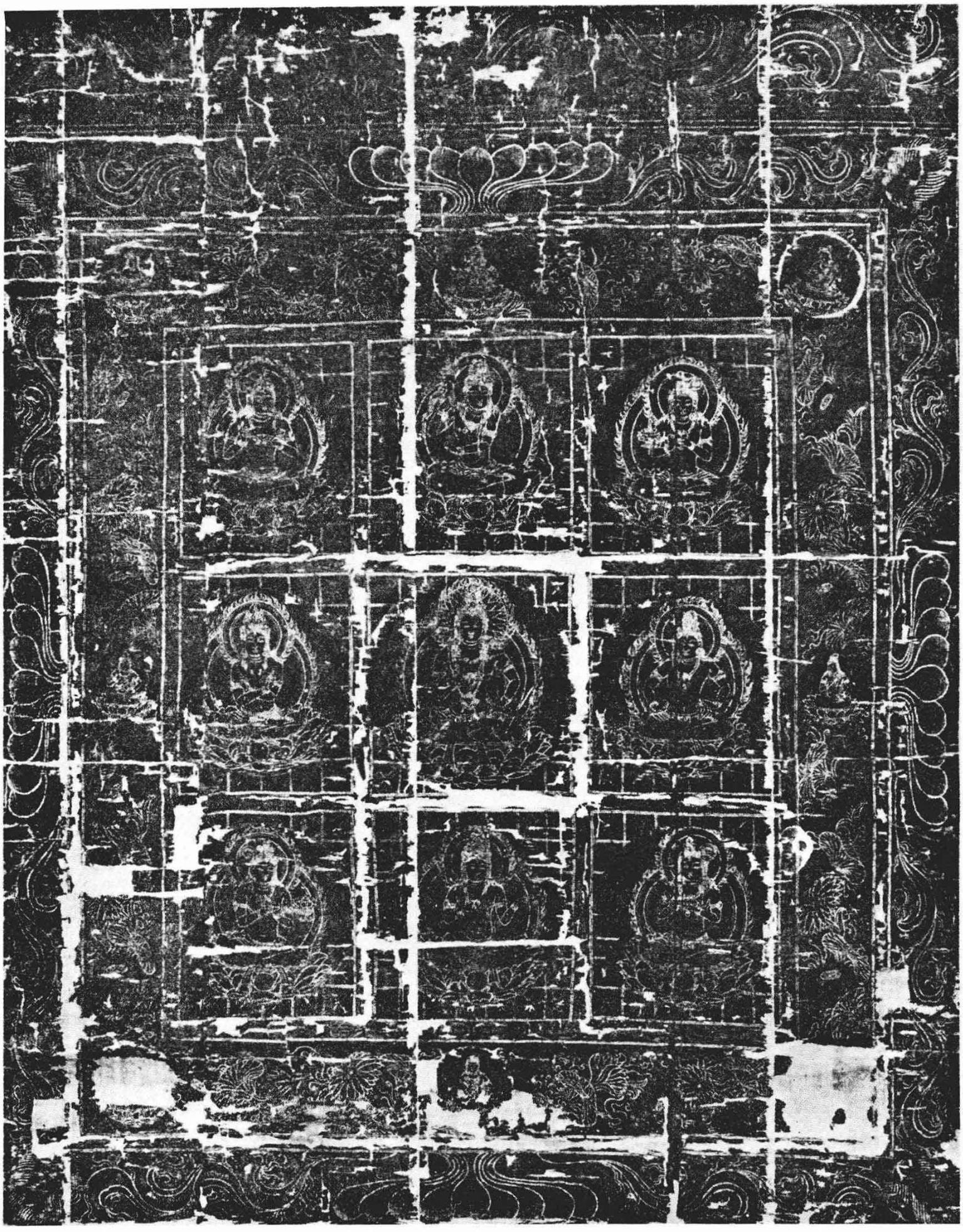
命運線

命運線

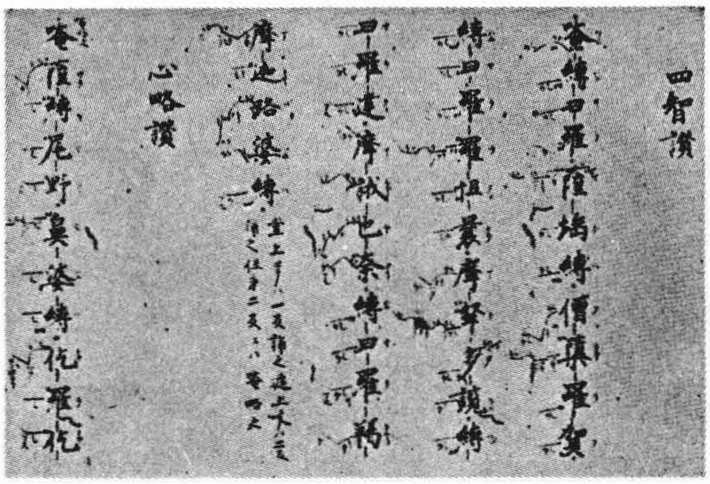
命運線

命運線

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com



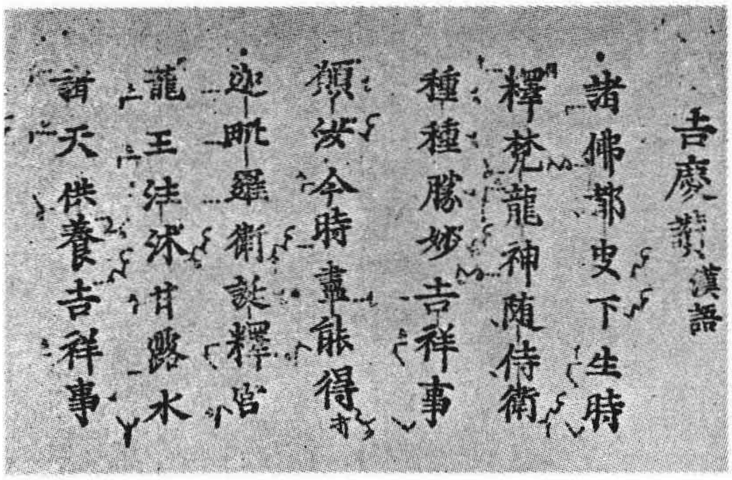
声明點譜圖



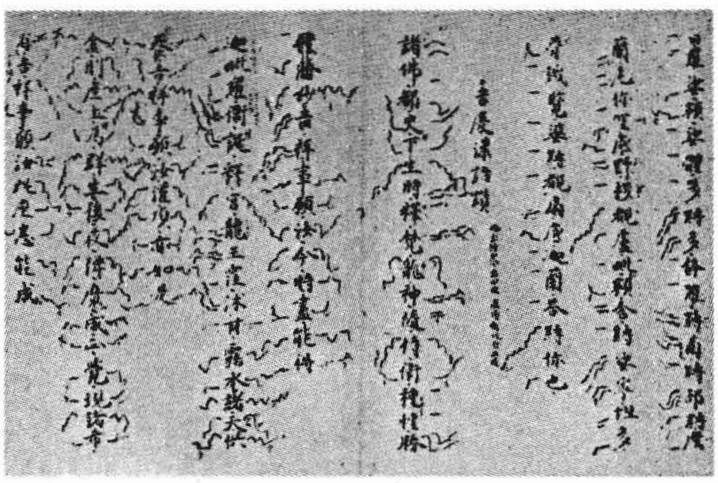
仁和寺聲明本

進流聲明本

同上



叡山聲明本



方山聲明本

三井聲明本

諸流聲明點の様式を示さんが為に之を掲出す　新義聲明の黒譜は進流墨譜に同じきを以て之を略す

凡例

一、本書は東密相傳の眞言密教を主とし、兼ねては天台宗相傳の台密並に修驗道に關する語彙を蒐集し、これに精密なる解說を施すを以て目的とす。

一、本書は本卷五冊附卷一冊より成る。字音によりて五十音順に排列附卷には各種の索引、古來使用の略字・作字・先德略名・參考書の略名表・補遺等を收錄す。

一、本書の解說は主として古來の相傳の說に據ると雖、まゝ新解釋を施せる所なきに非ず。又事相の儀式・修法・作法等は諸流の相傳區々にして詳述すること困難なるを以て、その主として行はるゝものを示し、或は相傳の流派を明示して數傳を並擧せり。

一、項目の配列は五十音順に依り、ンは最後にこれを置けり。但し濁音・半濁音は清音に次ぎ、ヤ行のイエはア行のイエに、ワ行のヰウエヲはア行のイウエオに、タ行のヂヅはサ行のジズに合したり。同一音にては人名は時代順に列ね、その他はつとめて漢字畫の少きものを前としたれども、前後の關係にてまゝ例外なきに非ず。

一、項目の字音の假名は檢出の便宜上發音のまゝをうつしたり、例へばアウ・アフ・ワウ・ラウをオウに、カウ・カフ・コフをコウに、レウ・レフ・リヤウをリョウとせるが如し。但し觀・火等の音は古來の儘を襲用してクワン・クワとし、光等の音のクワウは現時の發音に從ひコウとせるが如き特例あり。又發音が促音等に變化する場合は傍に細字の平假名を附してこれを示せり。例へばホウシン(法身)・イチサイ(一切)等の如し。音便も亦此例によれり、例へばクワンオン(觀音)・イチインエ(一印會)等の如し。但しガツショウ(合掌)の如く通俗化せるものは往々變化せるまゝの音を寫したるもあり。又古より慣例あるものは字音によらずして其慣例に從へり、例へばバザラ(跋折羅)の如し。されば語彙を檢出せんとする時は附卷の索引を利用するを便とす。

一、名稱同一にして而も部類等しきものは(一)(二)(三)等の符號を附して之を列擧し、部類異なるものは別項目を標出せり。但し人名に限り項下に生寂年記入の便宜上同名にても各別に標出せり。

一、人名は多くは諱に依りて標出したれどもまゝ字を用ひたる者無きに非ず。人名の下に記入せる數字は總て西曆にして生寂年又はその生存年代を示す。

一、項目の下に挿入せる歐字は梵語を示す。その然らざるものは、巴(巴利語)・藏(西藏語)等の文字を置きて之を區別せり。本文中の音

譯・義譯の語に挿入せる歐字亦これに準ず。

一、口繪には主として密教寺院所藏の靈寶名什古建築を收錄して、鑑賞と解說補助の便に供し、挿圖は間々優秀なる名品を加へたれども解說補助を主眼とせり。佛像は經軌の所說に合致せるものを主とし比較研究の資料として往々軌前の像及び顯教式・西藏式又は管見の像を加へたり。

一、口繪は佛像・肖像・文書・法具・堂塔と次第し、大途音順に排列せり。但し圖版の調和を考慮して順序顚倒せるものなきに非ず。又玻璃版を前とし銅版を後とせり。

一、解說文に↓とあるは、その下に記せる項目にゆづり、或は參照せしむることを示す、例へば第一頁下段に(↓阿字本不生)とあるは阿字本不生の項を見よと言ふ義なるが如し。又＊印を付せるは「佛說」の二字を省略せることを示す。

一、經軌・書籍の解題中、末尾に藏經・全書等の名を列ねたるはその書がこれに收錄せられたることを示す。又項末括孤內の書名は參考書なり。

增補訂正について

一、本文においては、できるかぎりの誤字・誤植等の訂正をしたが、正せないものは、追加補足と共に別表にまとめた。また梵語・西藏語等の訂正も別表にした。

一、年號は皇紀を西曆に變えた。

一、新しく付錄として略年表・印相圖・陀羅尼・密教關係論文目錄・血脈系譜・密教經典目錄等を加え、舊版各卷に掲げられていた圖版及び索引と共に別卷として用いやすくした。

種智院大學密教學會內
密教大辭典再刊委員會
委員　佐和隆研
村主恵快
高井隆秀
高藤圓應
月輪賢隆
烏越正道
夏目祐伸
松尾義海
(五十音順)

圖説小辭典

シ（續）

シハ　四波　四波羅蜜菩薩の略稱。

シバイタビヤクシン　濕廢多白身

濕廢多菩薩・濕吠多など云ふ。梵語の濕廢多(Śveta)は白色の義なり。↓白身觀自在。

ジバカラ　地婆訶羅 Divāharaḥ　六八八の頃

支那唐代の譯經僧。中印度の人、唐にては日照といふ。入藏に洞明し、博く五明を曉り、呪術に巧なり。利生を志して來唐し、儀鳳の初年京師に至り、同四年五月より則天后の垂拱末年まで、東西太原寺（東太原寺は後に大福先寺、西太原寺は崇福寺と改む）及び西京弘福寺に於いて譯經に從事す。沙門戰陀・般若提婆譯語し、慧智證譯す。又名德十人に勅して法化を助けしむ。所譯の經十八部三十四卷、就中密部に屬するものに、佛頂最勝陀羅尼經一卷・最勝佛頂陀羅尼淨除業障經一卷・七俱胝佛母心大準提陀羅尼經一卷・呪三首經一卷あり。後に翻經小房に於いて寂す、壽七十五。天后勅して洛陽龍門香山に葬る。（宋高僧傳二・開元錄九・貞元錄十二）

シハジヨウヒ　四波定妃

金剛界三十七尊中の四波羅蜜菩薩を云ふ、金・寶・法・業これなり、此四尊は四佛が大日如來を供養せんが爲めに流出せる尊なり。大日如來の定德を司る所の女尊なるが故に定妃と云ふ。秘藏寶鑰上云、四波定妃受ニ適悅法樂一。↓四波羅蜜菩薩。

シバタチシウ　柴田智秀　↓智秀。

シバチヨウズホウ　柴手水法

柴手洗法・柴洗手法（法は又作法に作る）ともいふ。手等を洗ふに水無き時、草木の葉を以て塵土等を拭ふ法。先づ右手を以て草若しくは木の葉一葉を取り、蓮華合掌の中に入れて押し揉み、唵尾哲帝莎呵（ॐ विचेत्य स्वाहा）の言を誦じて淨む。口を淨むべき時は、右手を以て葉を取り、口に入れ之れを嚙みて、唵迦羅二娑婆賀（ॐ कर्वसु स्वाहा）の言を誦ず。此法はもと律の法に出づ。然れども三十町（一傳は十八町）以內に水ある時は、此法を行ぜず。和泉國槇尾山は特に水乏しく、弘法大師此法を行じ給へりと傳ふ。（祕鈔・澤鈔九・傳流鈔十・成賢ノ作法集・印融ノ同口決・中院流一卷作法集等）

ジバツホウ　治罰法

祈願の事成就せざる時、本尊を降伏法に依りて治罰する法。蘇悉地經中成就具支法品に、以ニ阿毗遮嚕迦法一（中略）護摩用ニ芥子油一塗ニ其形像一便著ニ壯熱一、若伏他者、遍身皆痛、以レ瞋鞭打及以レ花打、用ニ前二眞言一以ニ其瞋心一而作ニ供養一、譬如ニ治ニ罰鬼魅一、治ニ罰本尊一法亦如レ是、如レ斯之法依レ教而作不レ得ニ自專一、若尊來現與ニ其成就一滿ニ本願一已則止ニ前事一作ニ扇底迦法一（息災法）とあるを本據とす。

シバテアライホウ　柴手洗法

↓シバチヨウズホウ　柴手水法。

シババカ　施婆縛訶　Çivāvahaḥ

寂留明菩薩の梵名。

シバマカミヨウオウ　濕縛麽歌明王

Çivamaghaḥ

始縛麽歌とも書く、梵語濕縛は幸運・昌盛の義、麽歌は富・力・賜物の義なり。もとは印度教の濕婆神の異名なりしと云ふ、不空羂索經等に此尊名出づ。寂留明菩薩に同じ。

シハライ　四波羅夷

四種の重罪。波羅夷(Pārājika)は極惡等と譯す。↓四重禁戒。

シハラミツ　四波羅蜜

金寶法業の四菩薩。↓四波羅蜜菩薩。

ジハラミツ　地波羅蜜

十地に於て修する所の波羅蜜行の義にして檀戒忍進禪慧方願力智の十波羅蜜を云ふ。此地波羅蜜を滿足せば佛果を證す。大疏一云、本行菩薩道時、次第修行地波羅蜜、乃至第十一地。

シハラミツイン　四波羅蜜院

胎藏現圖曼荼羅蘇悉地院の異名。秘藏記に此の名を出す。古くは蘇悉地院の名稱を用ひず、四波羅蜜院と呼びたるなり。

シハラミツサン　四波羅蜜ノ讃

金剛界四波羅蜜菩薩の德を讃歎したる梵偈。瑜祇經金剛吉祥大成就品百八名讃中の四波羅蜜菩薩讃歎の偈句なり。經に功能を說きて、若持此讃王一纏一遍稱誦、諸佛悉雲集、三十七智圓滿(中略)若有金剛子常持此讃王、諸佛常衞護といふ。梵唄として唱ふる時は、平調變音曲を附す。野山・根嶺共に正御影供後讃の第三段に之を唱へ、又傳供にも用ふることあり。經には四波羅蜜共に縛日里とあれども、魚山所載の讃は男聲の縛日羅と女聲の縛日哩とを區別せり。弘法大師請來本に據りて此の區別を立つといふ說あれども、大師請來本たる三十帖策子所載の瑜祇經を見るに現流經の文に同じきが故に、此說は誤なるべし。且く魚山所載の讃を擧ぐれば、

薩怛縛(satva 有情)縛日羅(vajra 金剛)曩謨率都帝(namo' stute 歸命汝)薩怛吠(satve 有情)縛日哩(vajri 金剛)曩謨率都帝(以上金剛波羅蜜)囉跢曩(ratna 寶)縛日羅曩謨率都帝、囉怛寧(ratne 寶)縛日哩曩謨率都帝(以上寶波羅蜜)達麽(dharma 法)縛日羅曩謨率都帝、達吠(dharme 法)縛日哩曩謨率都帝(以上法波羅蜜)羯磨(karma 業)縛日羅曩謨率都帝、羯吠(karme 業)縛日哩曩謨率都帝(以上業波羅蜜)なり。

シハラミツボサツ　四波羅蜜菩薩

金寶法業の四菩薩にして、金剛界大日如來の四親近なり、大日如來の大圓鏡智等の四佛智より出生す、諸尊能生の母なり、故に女形を示す、定尊なり。菩提心論云、已上四佛智出生四波羅蜜菩薩焉、四菩薩卽金寶法業也、三世一切諸聖賢生成養育之母。

ジバンドウ　持幡童

持幡者又は持幡とも云ふ、庭儀の時に玉幡を持ち運ぶ役なり。二人または四人の持幡、大阿闍梨の左右に侍して、各玉幡を捧ぐ。寛平・圓融・後宇多三法皇御灌頂の時は何れも僧侶これを勸めたれども、普通は童子をして勸めしむ。若し童子を得ざれば弱年の沙彌を代用す。顯密威儀便覽續編に持幡童の服裝を說きて、被髮の上に玉冠を戴き、半臂(衣名)・腰帶・表袴・絲鞋を著し、或は襲奴袴・淺履・藺履を著用すと云へり。(顯密威儀便覽續編上・乳味鈔十五・東寶記四)

シバンリヨボサツ　四伴侶菩薩

灌頂小壇の曼荼羅に住する四菩薩なり、大日經具緣品云、內心大蓮華、八葉及鬚蘂、於四方葉中、四伴侶菩薩、(中略)謂總持自在、念持利益心、悲者菩薩と。略出經四にも同じく、東方陀羅尼自在王、南方發正念、西方利樂衆生、北方大悲者とせり。大疏八の深秘釋によらば、四伴侶とは心所は心王の伴侶にして心王四法を成就する時能く四種の如來事をなすを云ふ。總持自在菩薩とは阿字門に通達する時は一切の陀羅尼に自在を得るを云ふ。念持菩薩とは陀羅尼自在の故に如來の念覺如意三昧を成就するを云ふ。利益心菩薩とは已に是の如き念を得て本願を憶ひ、普く法財を雨らして衆生に施すを云ふ。悲者菩薩とは已に無盡の財を以て無限の施をなし、諸の下劣の衆生に對し大悲心を興して之を救ふを云ふ。(大日經二・同疏八・略出經四等)

シヒ　四臂

菩薩明王等に四臂六臂等の尊往々あり。然るに蘇悉地經補闕少品の蓮花部曼荼羅に四臂・六臂・十二臂等を菩薩名として列ぬ。十一面觀音に四臂を具せる故に、同經の四臂とは蓋し十一面觀音なるか。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

ジヒ　慈悲

大慈と大悲とを云ふ、大悲は衆生の苦を抜き、大慈は衆生に樂を與ふ。慈悲は佛心の本にして顯密二教の通談なれども、密教には特に胎藏曼荼羅除蓋障院の悲旋潤・慈愍慧菩薩等慈悲の德を表顯する尊を說けり。又如來の正法輪身たる菩薩は總じて慈悲の德を司る尊なり。

ジヒゲン　慈悲眼　Dṛiḍha-dṛiṣṭi-traṭ

慈眼又は慈愛眼とも云ふ、柔和の眼相にして息災相應なり、四種眼の一。↓四種眼。　都部要目云、慈眼除レ毒息ニ怨敵一也。略出經一云、若欲レ爲ニ除災一者面向ニ北方一（中略）以ニ慈悲眼一分明稱ニ密語一（中略）慈悲眼者如ニ須彌嵐及曼陀羅山堅固不一移其眼不レ眴是名ニ慈悲眼一。三十卷大教王經七云、又作ニ堅固慈愛眼一、猶如ニ須彌諸山石一、此說名爲ニ慈愛視一、能破ニ病毒及執魅一。

シヒビナヤキヤ　四臂毘那夜迦

四臂を具せる歡喜天なり。↓歡喜天。

シヒフドウ　四臂不動

不動明王は多く二臂なれども四臂のものあり、又は鎭宅不動と名く。天等の首領として十二天曼荼羅等に中尊とす。↓不動明王。

シビホウ　指尾法　↓北斗指尾法

ジビヨウクワンジザイ　持瓶觀自在

四十觀音の一、胡瓶觀音とも名く。千光眼祕密法經云、若求ニ善和ニ眷屬一者、當レ修ニ胡瓶法一と。千手觀音の胡瓶を持てる手より現ぜる菩薩なり。【形像】右手に胡瓶を執る、瓶の首は金翅鳥の如し、左手を臍の上に當て上に向けて胡瓶を受くる勢にす。その他の相好は與願觀自在に同じ。【印契】未敷蓮花印をなし、二大指を開き立てゝ指頭を合す。【眞言】唵（oṁ）縛日羅達磨（vajra dharma 金剛法）摩賀昧怛哩（mahāmaitrī 大慈）網娑縛（珊婆縛 sam bhava ? 發生）娑縛賀（svāhā）。（千光眼經）。

シフウウダラニキヨウ　止風雨陀羅尼經

止風雨經とも云ふ。金剛光燄止風雨陀羅尼經の略名。

シフウウホウ　止風雨法

止雨法ともいふ。暴風惡雨を止め、或は大法會などの當日の降雨を止むるに修する法。金剛光燄止風雨陀羅尼經を本軌として修し、止風雨經法とも稱す。此法の本尊に火天、摩那斯龍王、迦樓羅天、不動明王、金剛薩埵、觀自在或は釋迦・金剛手・觀自在の三尊、或は三尊に火天・摩那斯龍王の二尊を加へたる五尊を本尊とする等數說あり。火天は焚燒を主るが故に本尊とし、摩那斯龍王は止風雨經に、當便與ニ此素龍王一授名ニ摩那斯龍王一、主ニ諸毒龍一、當誓願言、攝ニ禦禁一止一切災風惡雲惡雨雷雹霹靂一、諸惡毒龍一時順伏、摩那斯龍王俱來入レ甕則斷禁止ニ災惡毒氣一、如レ是修治則得ニ一切諸惡毒龍災風毒氣惡雲惡雨雷雹霹靂一時順伏一而皆止レ之と說けるに依る。迦樓羅天を本尊とするは、同じく止風雨經に復有ニ大身孽嚕荼王一（中略）我有ニ金剛嘴光燄睒電眞言一、如レ是眞言神力威猛能ニ燒能ニ壞諸惡毒龍身心膚肉一、亦能禁ニ止一切災害惡風暴雨雷雹霹靂一、亦能增ニ長大地一切卉木藥草苗稼華果子實滋味一と說けるに據る。瑜祇經降伏一切魔怨品には有レ佛名ニ金剛大藥叉一（中略）卽成ニ孽嚕拏一噉ニ食諸龍毒一と說く。不動明王を本尊とするは、不動使者念誦法に次作ニ師子奮迅印一（中略）誦ニ七遍一能降ニ伏一切惡魔等一、以レ印摩ニ（麼カ）惡雲雨一應レ時皆散、散已解レ印、若惡風雨不レ止者取ニ棘針一和ニ白芥子一燒、呪一百八徧更誦ニ根本呪一一百八徧、非ニ但風雨散止一其龍神等却來擁ニ護行者一と說き、底哩三昧耶經に、亦此義を說ける等を本據とす。長寛二年七月廿日八條女院の御堂供養の時、宗明不動明王を本尊として修し雨を止めたりといふ。次に釋迦如來・金剛手・觀自在の三尊は請雨經法の本尊にして、諸尊に皆祈雨・止雨の功德あるが故に、今亦三尊或はその中の金剛薩埵（金剛手）又は觀自在一尊を止雨法の本尊とするなり。五尊を本尊とするは、請雨經法の本尊たる三尊に、火天と止雨龍王とを配合したるものにて口傳の說なり。千心（仁海）の傳等是れにして、弘法大師唐に在りて相傳し給ふと稱す。乳味鈔十には、霖雨を止除し、甘雨を祈求するには火天を本尊とし、御卽位或は庭儀灌頂等一日の快晴を祈願するには五尊を本尊とすといふ。上述の外諸經に止雨の文あり、覺禪鈔止雨法に引けり。守護經九に止雨陀羅尼を說きて、唵（oṁ 歸命）阿蜜喋低底（amṛite ? 甘露）吽（hūṁ 摧破）底瑟吒（tiṣṭha 守護）娑縛賀（svāhā 成就）といふ。諸本尊の印言等は該尊の項に就きて知るべし。（止風雨經・覺禪鈔・薄草紙・厚草紙・乳味鈔十・幸心方聽聞記三）

シフウウマンダラ　止風雨曼拏羅

止風雨法を修するに用ふる曼荼羅。金剛光焰止風雨陀羅尼經に二肘四肘八肘等數種の曼拏羅を塗飾することを說けども、多くはその上に淨水香華を置き、或は金剛橛を挿し、幢竿を竪て幡蓋を懸くる等、普通の壇に

して曼荼羅圖には非ず。中に於て龍王を列ぬる一の曼荼羅を說けり。田中に四肘の方壇を作り、香水等を以て塗り、四門を開き、四面四角中央に八葉開敷蓮華を畫き、五の龍王を揑作し、壇の東面には三頭の龍王、頭上に三蛇首あり　南面には五頭龍王、頭上に五蛇首あり、西面に七頭龍王、頭上に七蛇首あり、北面に九頭龍王、頭上に九蛇首あり、中央に一頭龍王、頭上に一蛇首を出す。是等の龍王の身量は十二指、面目形容は天神の如く、みな八葉蓮華の上に半跏坐すと云へり。

シブキヨウシヤ　四奉敎者

灌頂小壇曼荼羅の四伴侶菩薩の隅角に住する尊なり。大日經具緣品云、內心大蓮華、八葉及鬚蘂、於二四方葉中一、四伴侶菩薩(中略)所餘諸四葉、作二四奉敎者一、雜色衣滿願、無礙及解脫と。大疏八には東南著雜色衣、西南滿願、西北無礙、東北解脫とす、又同深秘釋には、言二奉敎一者、卽是從二此四門一、折伏攝受行二如來事一、當レ知著雜色衣卽是陀羅尼自在王所爲事業、滿願是念持如意寶王所爲事業、無所罣礙是慈悲法施所爲事業、解脫是大悲方便、拔苦衆生所爲事業、故名二四奉敎者一と釋せり。此の著雜色衣は四執金剛の被雜色衣と混同せるか。略出經四には、東北修轉勝行、東南能滿願者、西南無染著、西北勝解脫とせり。(大日經二・同疏八・略出經四等)

シブジツシユ　至部實主

總合的依主の意。釋論五云、眞如之性如二虛空界一、至部實主於二障碍及無碍中一、爲作二歸依一無二所碍一故。(釋論贊玄疏四・同普觀記五・同快鈔五ノ三)

シブシヨ　四部ノ書

玄秘鈔・金寶鈔・諸尊要鈔(妙鈔)・秘鈔を云ふ。後三部に對して地藏院流等醍醐系の流派にて此稱呼を用ふ。

シブタクケン　四部澤見

澤見鈔・澤鈔・澤見新鈔の三部を三部澤見と名け、之に甲乙澤見鈔を加へて四部澤見といふ。↓三部澤見並に各語。

シブツ　四佛　↓四方四佛。

シブツエザ　四佛會座

大日經の說會に寶幢・開敷華・無量壽・天鼓雷音の四佛ありや否やを論ずる算題。東密古義派に用ふ。難方は四佛ありとは見えずと主張し、答方は四佛ありと說く。難方　經文を見るに能說の敎主は獨一法界毘盧遮那にして眷屬は十九執金剛と四大菩薩との內、大二眷屬のみ、何處にも四佛ありと說ける文なし。是を以て經の敎主成就の句に薄伽梵と表し、疏には薄伽梵卽毘盧遮那本地法身と釋し、又は如來在二此宮中一爲二獨處一耶有二眷屬一乎と釋し、又衆成就の經文の總句には一切持金剛者皆悉集會と云ふ。衆成就の經文に內大二眷屬通局の異論ありと雖、未だ四佛ありと云はず。復別說の經文に偏に菩薩金剛內大二眷屬を明して四佛を說かず。故に疏には一切持金剛者皆悉集會、次明二妙眷屬一(中略)所謂執金剛等也と釋せり。說會に四佛ありとは見えず。答方　大日經の說會は大悲胎藏四重圓壇なれば何ぞ四佛なからんや。四佛の說處につきては古來三義あり。一義には敎主成就の句たる薄伽梵に五佛悉く有りとす、これ五佛を心王心數に分別せば五佛皆心王に屬するが故なり(↓五佛心王)。十住心論十に經の一時薄伽梵(中略)皆悉集會の文を釋して、此總明二大秘密究竟心王如來大毘盧遮那五智四印及心數微塵數眷屬一と云ひ、薄伽梵を以て心王如來五智四印とせるは其證なり。一義には經の如來加持廣大金剛法界宮の文に五佛を說くとす。十住心論に此文を釋して、是則五佛之異名、大日・寶幢・開敷・彌陀・天鼓如レ次配とあるは其證なり。一義には經の一切持金剛者皆悉集會の句に四佛ありとす、これ主伴を分たば四佛は伴に屬す可きが故なり。十住心論に此文を釋して、言二金剛一者五部諸尊所持法界幟幟と云へるはその證なり。以上の三義共に宗決の答方に出づと雖も、第二說は依正雜亂の過失あり、第三說は五佛心王の論に於ける難方の義に同ず、共に依用し難し、第一說を以て正義とすべきか。此說は覺海相傳の義なること遍明鈔に見ゆ。

壽門の論則たる杣保四には四佛在會座と題して之を論じ、宗決と同じく薄伽梵の句に五佛ある義を成ずれども、四佛の分齊につき寶門と義を異にせり。寶門には五佛共に敎主と定め、壽門には大日を敎主とし四佛を證明師と定む。詳しくは四佛同聞衆の項に論ずるが如し。(宗義決擇集四・杣保隱遁鈔四・本母集十三)

シブツカジ　四佛加持

四所加持とも名く。行者が阿閦・寶生・彌陀・不空の四佛に加持せらるゝをいふ。傳法灌頂の時は正覺壇に於て此印明を結誦す。金剛界法修法の際には、五相成身觀を修して、行者既に自證圓極し佛身圓滿するが故に、次に此の印明を結誦して、已成の四佛、新成の如來を加持して四智の德を堅固ならしめ決定せしむる義を表す。卽ち阿閦・寶生・彌陀・不空の四佛は順次に大

圓鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智の四智を加持印成す。金剛界發慧鈔中に云く、御口決云、雖レ依ニ五相觀一唱ヘ成佛軌則ヲ猶未ニ決定一、今以ニ四佛加持印言一印ニ四處一時、成佛義決定故、更用ニ四佛加持一。例如レ彼五相成身觀ニ付寶藏一、此四佛加持後授ヘ得印鑰ヲ也と。四佛綜合すれば、即ち大日の故に、四佛加持を行ずれば、自ら大日加持と成るが故に、諸次第に大日加持を出さずとする說と、諸佛加持を大日加持と義を取り、合して五佛加持を出すとする說と兩說あり(→諸佛加持)。凡そ四佛加持は普門大日尊の行法には皆結誦すれども、自餘の尊の一門の行法には其尊當部の一を用ふ。畢竟一方に四方の德を具するなり。三摩地法に唯東方の一尊を出せるが如し。

【印明】蓮華部心軌に、眞言を說けども、印は結ニ四如來三昧耶印契一と記し印相を說かず。略出經二に具に印言を說けり。(一)不動佛。阿閦如來なり。外縛して二中指を竪てゝ針の如くし、心に置く。獨股杵印なり。薩埵金剛印と名く。外縛は蓮華、兩掌は月輪、二中立て合すは獨股杵の故に、月輪上の蓮華に獨股杵を立てたる形なり。阿閦佛は東方發菩提心門の尊なるが故に、印を心に當つ菩提心は諸法の實相にして獨一法界なる義を表して獨股印を用ふ。眞言は唵(oṁ歸命)縛日羅薩怛縛(vajra sattva 金剛薩埵)地瑟姹(adhiṣṭa 加持)娑縛賀(svamam 於我)吽(hūṁ 種子)。(二)寶生尊。外縛して二中指を寶形にし、額に當つ。金剛寶契・寶部三昧耶印と名く。寶生佛は南方修行福德門の尊なるが故に、寶珠を以て印契とす。南方は灌頂智の故に印を額上に置く。額は平坦にして平等性智に相應し、灌頂の寶冠を被らしむる處なる故なり。眞言は唵(oṁ歸命)縛日羅囉怛曩(vajra ratna 金剛寶)地瑟姹(adhiṣṭa 加持)娑縛賀(svamam 於我)怛洛(traḥ種子)。(三)無量壽佛。外縛して二中指を蓮葉にし、喉に當つ。蓮華部三昧耶印と名く。二中指の蓮華形は自性淸淨の心蓮を表す。無量壽佛は西方證菩提智慧門の尊にして、自ら本性淸淨の心蓮を開覺して菩提を證し、復一切衆生の心蓮を開敷して菩提を證せしめ給ふ故に蓮華形を以て印とす。印を喉に當つるは、無量壽佛は妙觀察智にして說法談義を主るが故なり。眞言は唵(oṁ歸命)縛日羅達麼(vajra dharma 金剛法)地瑟姹(adhiṣṭa 加持)娑縛賀(svamam 於我)紇哩(hrīḥ種子)。(四)不空成就佛。外縛して二中指を掌中に入れて面を合せ、二大指・二小指相拄へて頂に置く。羯磨部三昧耶印と名く。印は羯磨形なり、二中指は輪臍を表す。又內に入るゝは入涅槃の義を示す。不空成就佛は北方入涅槃大精進門の尊にして、大寂定中に於て二利の事業成辦する故に羯磨を以て印とす。幸聞記には不空佛所座の迦樓羅鳥の形を標すと說けども、三昧耶會の印にして、所座に非ず。印を頂上に置くは事業究竟の義を表す。眞言は唵(oṁ歸命)縛日羅羯磨(vajra karma 金剛業)地瑟姹(adhiṣṭa 加持)娑縛賀(svamam 於我)惡(aḥ種子)。(蓮華部心軌・三摩地法・略出經・諸儀軌寡承錄十三・金剛界發慧鈔中・傳流傳授私勘二・金界事鈔上・金界幸聞記・乳味鈔三・金剛界對受記二・金剛界淨地記・金剛三密鈔二等)。

シブツケイマン　四佛繫鬘

繫鬘の二字、小野・醍醐・中院等小野方諸流には多分ケマンと讀み、廣澤諸流はケイマンと讀む。阿閦・寶生・彌陀・不空の四佛、行者の五智の寶冠に、鬘を繫けて莊嚴する印言をいふ。仍て略出經二に四佛繫鬘を說き畢りて、次想自身以爲ニ一切如來寶冠莊飾一已と說けり。金剛界法修法の際には、五佛灌頂の印言を結誦して五智の寶冠を戴くが故に、次に此の印明を結誦して、更に已成の四佛、新成の如來の寶冠に鬘を繫けて莊嚴し給ふ義を表す。傳法灌頂の時は正覺壇にて此の印明を結誦す。蓮華部心軌には次於ニ灌頂後一應レ繫ニ如來鬘一と說き、略出經には於ニ已頂上一繫ニ灌頂鬘一と說けり。不動佛は金剛部の故に獨股金剛杵所成の鬘、寶生尊は寶部の故に如意寶珠所成の鬘、無量壽佛は蓮華部の故に蓮華所成の鬘、不空成就佛は羯磨部の故に十字羯磨杵所成の鬘なり。而して金剛鬘は寶冠の東北隅、寶鬘は東南隅、蓮華鬘は南西隅、羯磨鬘は西北隅に繫けて莊嚴す。この四佛繫鬘は普門大日尊の行法には皆結誦すれども、自餘の尊の一門の行法には其尊當部の一を用ふ。畢竟一部に四部の德を具するが故なり。蓮華部心軌・略出經二等は都法に約して四部の尊の繫鬘を出し、普賢金薩軌・勝初瑜伽軌・金剛王軌・千手軌・如意輪瑜伽等は當部の一を擧ぐ。

【印相】四佛加持の印に同じ。所作は印を分ちて拳にして縈ふ儀を用ふるあり、用ひざるあり、垂帶の後、心前に合掌して頂に散ずるあり、然せざるあり、流派により口決により異說區々なり。且く三寶院流甲鈔の說(憲深の口傳)によりて說かば、各々次の如く四佛加持の印を結び、各々の明を誦じ、各々縛を解き、結胄の印をなす。謂く二手金剛拳にして各頭指を鉤し竪て印の面を身に向けて糸を縈ふが如くすること三度して兩掌を伸べ、頂の後より前に向つて垂帶の如くす。此間無言なり。この所作は四佛一々の鬘を各々寶冠の上に繫けて頂後にて鬘帶を結び、鬘帶の餘りを左右の肩に掛け兩邊に垂るゝなり。垂るゝは四智の方便を表す。鬘帶は金剛杵等の鬘を莊嚴せんが爲に附する帶にし

て、如意輪瑜伽に垂帛作白帛と說き、普賢金薩軌に繫鬘繒又は垂引繒帶と說くが故に繒帛の類なるべし。

【眞言】(一)不動佛。唵(oṁ 歸命)縛日羅薩怛縛(vajra sattva 金剛薩埵)摩羅(māla 鬘)毘詵遮(abhiṣiṁca 灌頂)𑖨(māṁ 我)鑁(vaṁ 種子)。(二)寶生尊。唵(oṁ 歸命)縛日羅囉怛曩(vajra ratna 金剛寶)摩羅(māla 鬘)毘詵遮(abhiṣiṁca 灌頂)𑖨(māṁ 我)鑁(vaṁ 種子)。(三)無量壽佛。唵(oṁ 歸命)縛日羅鉢娜麼(vajra padama 金剛蓮)摩羅(māla 鬘)毘詵遮(abhiṣiṁca 灌頂)𑖨(māṁ 我)鑁(vaṁ 種子)。(四)不空成就佛。唵(oṁ 歸命)縛日羅羯磨(vajra karma 金剛業)摩羅(māla 鬘)毘詵遮(abhiṣiṁca 灌頂)𑖨(māṁ 我)鑁(vaṁ 種子)。四佛の外に別身なき故に大日を擧げず。眞言の終の鑁字に就き、一傳には四佛卽大日の義を表すと。一傳には鑁を vi (baṁ)とし、鑠菩薩の種子にして結縛の義なりと云ふ。一傳には頂の義となす。法皇金界二卷次第の註に、若し大日繫鬘を用ふれば大日自在の契を用ひ、眞言に馱都の句を加ふる旨を示せり。諸儀軌禀承錄十三には、別本有ニ別大日繫鬘印言一不可也と言へり。(蓮華部心軌・略出經二・普賢金剛薩埵軌・勝初瑜伽軌・金剛王軌・如意輪瑜伽軌・諸儀軌禀承錄五・同十三・金剛界發慧鈔中・傳流傳授私勘二・金界事鈔上・金界幸聞記・乳味鈔三・金剛界對受記二・金剛三密鈔二・金剛界淨地記等)

シブツゾクシンジュ　四佛屬心數

五佛心王に同じ、↓該項。

シブツドウモンジュ　四佛同聞衆

具には大日經會座四佛屬ニ同聞衆一歟と題す。大日經會座の四佛は教主なるか同聞衆なるかを論ずる算題。東密古義派壽門に用ふ。凡そ大日經の會座に四佛の存することは壽寶兩門共に四佛會座の論則に於て成立する所にして異議なしと雖も、四佛の分齊に關しては兩者の說相反せり。寶門には四佛會座の論に於て五佛心王の立脚地より四佛共に教主に屬する旨を示し、別に四佛同聞衆なる論則を設けて、難方は寶門の說の如く教主に屬する旨を設けず。然るに壽門にては此論則云ひ募り、答方は同聞衆に攝する旨を成立せり。

難方　四佛は心王の如來果位の佛身なり何ぞ同聞衆に列ぬ可けんや、凡そ經の文相を見るに衆成就の文に於ては十九執金剛と四大菩薩とを列ぬるのみにして四佛を擧ぐる所無し、況んや四佛同聞衆ならば宜しく上首とす可し、然るに此義更になし。又諸經の例を考ふるに一經として同聞衆に佛身を列ねたるものなし。其上四菩薩卽一毘盧遮那の深旨なれば四佛を教主の句に安ずべし。彼の金剛頂經には五佛を教主成就に置けるには非ずや。依つて文證を考ふるに大疏二十には五佛四菩薩豈異身乎、卽一毘盧遮那と釋し、十住心論十には五佛卽心王、餘尊卽心數と說く、其他證文尠からず。

答方　教主は中臺大日獨一法身なり、邊葉の四佛を教主の位に加ふ可らず、諸經の例に準ずるも教主は一佛たる可し何ぞ五佛教主と云ふ可けんや、四佛は同聞衆たらざる可らず。其文證を云はゞ、經に薄伽梵とある を疏一に釋して薄伽梵卽毘盧遮那本地法身と釋し、寶鑰下には眞言密教兩部祕藏、是法身大毘盧遮那如來與ニ自眷屬四種法身一、住ニ金剛法界宮及眞言宮殿等一、自受法樂故所ニ演說一と釋す、此意明に自眷屬四種法身の中に四佛ある可し。(杣保隱遁鈔四)

シブビナヤキヤ　四部毘那耶迦

四類の障碍神なり。毘那耶迦は普通に象頭人身なれども、此に所謂毘那耶迦は必ずしも然らず、その形容種々雜多にして名狀すべからず。その四部とは摧壞部・野干部・一牙部・龍象部なり。蘇婆呼童子經上云、世間有ニ諸障難毘那耶迦一、爲レ覓レ過故、常求ニ念誦人便一、於レ中好須ニ作意分別智慧善分別知一。魔黨合有ニ幾部一、總而言レ之都有ニ四部一、何等爲レ四、一者摧壞部、二者野干部、三者一牙部、四者龍象部、從ニ此四部一流ニ出無量毘那夜迦眷屬一、如ニ後具列一。摧壞部主名曰ニ大將一、其部之中有ニ雜類形狀一、有ニ七阿僧祇一以爲ニ眷屬一。野干部主名曰ニ象頭一、於ニ其部中一形狀難レ可ニ具名一、有ニ十八俱胝一以爲ニ眷屬一。一牙部主名曰ニ嚴髻一、其部之中種々身形面貌可レ畏、有ニ一百四十俱胝眷屬一以爲ニ隨從一。龍象部主名曰ニ頂行一、於ニ其部內一有ニ種々形一、不レ可レ知レ名、有ニ一俱胝那由他一千波頭摩一以爲ニ眷屬一と。

ジフリヒダラニジザイ　自不離彼陀羅尼自在

彼不離陀羅尼自在に對す。自とは相大、彼とは體大を指す、乃ち相大の德、體大を惣攝し任持して不離なるを自不離彼陀羅尼自在と云ひ、體大の德よく相大を惣攝任持するを彼不離自陀羅尼自在と云ふ。釋論六云、心法雖レ一而有ニ二種陀羅尼自在用一故、云何爲レ二、一者自不離彼陀羅尼自在、二者彼不離自陀羅尼自在。(釋論快鈔六ノ二)

シブン　支分

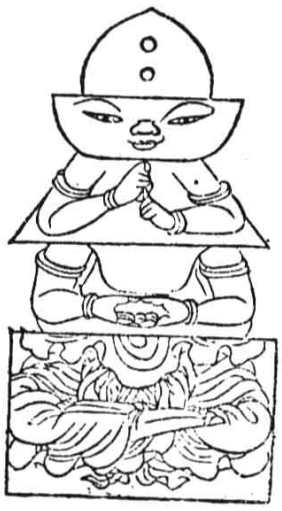
(一)手足等の如き四肢五體の身分を云ふ。大日經一云、世尊一切支分皆悉出ニ現如來之身一。

(二)修法灌頂等に要する支具及び印明等をも云ふ。護

摩に要する乳木・香・薬等を護摩支分と云ひ、印明結誦に誤謬缺漏あるを闕支分と名け、或は大疏三に入曼荼羅の支分を明すとき阿闍梨支分・弟子支分等を説くが如く、支分の名稱は極めて廣く用ひらる。

シブンジョウマンダラ　支分生曼荼羅

本尊或は阿闍梨・行者等の一身に布列したる曼荼羅を云ふ、極祕の曼荼羅なり。支分とは四肢五體の身分なり。此の曼荼羅に三重流現の曼荼羅と五輪成身の曼荼羅とあり。前者は頭を中胎八葉院とし、心より咽に至る迄に第一院の内眷屬諸執金剛を安じ、心より臍に至る迄に第二院の大眷屬菩薩を置き、臍より以下に生身釋迦等の第三院を安ず。即ち一身に胎藏曼荼羅を流現するなり。大疏三・同十四に詳しく出づ。但し大疏五に明すものは曼荼羅分布の樣これと少しく相違せり。謂く、毘盧遮那自心の八葉華を中胎藏とし、咽より頂相に至る迄を第一重とし、臍より咽に至るまでを第二重とし、臍より以下を第三重とす。次に五輪成身の曼荼羅は大日經祕密曼荼羅品・大疏十四に出づ、膝を地輪とし、腹を水輪とし、胸を火輪とし、顏面を風輪とし、頭頂を空輪とす。興教大師ノ五輪九字祕釋に詳しくこれを説けり。大日經一具緣品云、世尊一切支分皆出現如來身。大疏三云、今欲説曼荼羅圖位故還約佛身上中下體以部類分之、自臍以下現生身釋迦示同人法及二(義釋作三)乘六趣種々類形色像威儀言音壇座各々殊異及其眷屬展轉不同、普於八方如曼荼羅本位次第而住、自臍以上至咽出現無量十住諸菩薩各持三密之身、與無量眷屬普於八方如曼荼羅本位次第而住、然此中自有二重、從心以下是持大悲萬行、十佛刹微塵諸内眷屬、從心以上是持金剛密慧、十佛刹微塵諸内眷屬通名大心衆也、從咽以下至如來頂相出現四智四三昧果德佛身(中略)亦於八方如曼荼羅本位次第而住。(大日經五・同一・大疏十四・同五・五輪九字祕釋・行者鈔四)



シベン　師鞭　六七八の頃

支那唐代の入竺僧。齊州の人、呪禁を善くし梵語に通ず。高宗の時玄照と共に北天竺より西印度に向ひ、菴摩羅割跛城に到り國王の歸敬を受け、その王寺に居ること一夏にして疾を得て寂す。年三十五。(大唐西域求法高僧傳上)

ジヘンホンガク　示變本覺

清淨本覺のこと。釋論三云、清淨本覺名自然本智(中略)號示變本覺。

シホウ　四法　↓四種法。

シホウ　四寶　金・銀・瑠璃・頗梨の四種寶物を云ふ。

ジホウオウインデンボウクワンチヨウザツキ　持寶王院傳法灌頂雜記

一卷、親尊記。文永元年十二月四日持寶王院に於て、實勝が覺洞院法印親快に從つて傳法灌頂を受けし時の雜記なり。親快の命によりて一會の儀細大もらさずこれを記す旨、道快寫本の奥書に見ゆ。寫本現流。

シホウケツ　四方結　↓金剛墻。

ジホウコンゴウ　持寶金剛

如意輪觀音の密號。寶波羅蜜菩薩の密號。

ジホウコンゴウ　持寶金剛

慈猛意教流賴中相承印信三十三通・淨空相承印信三十一通の一。師資更並座の大事を傳ふる印信なり。淨空はこの師資更並座法を以て邪法歟といへり。裏紙には持寶金剛と記すれども、印信には持寶金剛王院・持寶金剛王と記せるものあり。賴中相承印信は二紙あり。一紙には作法を擧げ、終に持寶金剛王院口頌曰と標して、勝賢作と傳ふる師資更並座の頌文を附載す。持寶金剛王院とは覺洞院勝賢を指す。而も居所によりて名くるか否か未詳なり。一紙には持寶金剛口決と標し、頌文に就きて詳細なる釋を施し、奥に嘉曆二年七月二十一日附眞性の記・同年八月二十五日附宥範の記・建武二年二月五日附宥印の記を載せたり。淨空相承印信は三紙ありて、前傳と認め方に小異あり。↓師資更並座大事。(野澤諸法流印信類聚)

ジホウコンゴウネンジユシダイ　持寶金剛念誦次第

一卷、弘法大師撰。如意輪觀音法の金剛界立念誦次第なり。持寶金剛とは如意輪菩薩を云ふ、如意寶珠・寶輪・寶蓮華を持し、寶部の三昧に住する故に此金剛號あり。大師撰述の次第に別に持寶金剛念誦法次第一卷あり、兩本共に弘法全集七・日藏眞言宗事相章疏に收錄す。又弘法全集十三に持寶金剛念誦次第一卷あり、尾題に如意輪菩薩行法次第と云ふ、弘法大師作又は聖寶作と稱

せらる。ほゞ十八道立の次第にして前の兩次第より簡略なり、但し印明等は詳記して初心者の行用に便す。

シホウサン　四方ノ讃

東方讃・南方讃・西方讃・北方讃の四種の讃を總稱す。十六大菩薩の四方の各上首卽ち金剛薩埵・金剛寶菩薩・金剛法菩薩・金剛業菩薩の讃なり。魚山には此の四方の讃を擧げ、十六大菩薩の讃は俱に諸祕讃の中に攝む。金剛頂蓮華部心軌・二卷教王經上に十六大菩薩の梵讃を擧げ、三卷教王經二にその漢讃を示し、俱に百八名讃と名く。常に用ふるは梵讃にして、梵唄に唱ふる時は雙調唯呂曲を附す。根嶺の所傳は之に異なり、平調唯律曲を用ふ。東方の讃の頭句の初の縛を庭上の時は去聲、平座の時は上聲に出し、而も早疾高聲に發音し、且つ一讃をすべて疾く唱ふ。是れ初地に於て速疾に萬德を圓滿する義を表す。餘の三方は化他門にして化他は無盡の故に寛かに唱ふ。故に隆然の頌に但東早高餘下靜といふ。

シホウシブツ　四方四佛

密教根本の兩部曼荼羅の中心となり、五智・五轉の法門を內證とせる五佛の中、中央の大日如來を除きたる四方の佛なり。四方四佛は旣に顯教經典・雜部眞言經等にも之を說き、その佛名は密教の四方四佛と大差なし。但し施餓鬼法の五如來は兩部曼荼羅の五佛と全く相類せず、智炬陀羅尼經の四方四佛はその名は類せざれども、その意義に一縷の相通するものあるを思はしむ。

	東	南	西	北
智炬陀羅尼經（觀佛三昧經九 陀羅尼集經十）	智炬	金光聚	實語	雷音王
不空羂索經九	阿閦寶	阿閦寶相	無量壽	微妙聲
清淨觀世音菩薩陀羅尼經	阿閦幢	寶幢	無量壽	天鼓音王
最勝王經八	不動寶	寶星	開敷蓮華王	無量光
一字佛頂經四	寶幢	華開敷	無量壽	不動
大日經具緣品	寶幢	寶生	阿彌陀	不空成就
金剛頂略出經	阿閦鞞	寶生	阿彌陀	不空成就
三卷教王經分別聖位經	不動	寶生	觀自在王	不空成就

攝眞實經の說は略出經に同じ。阿閦は不動の義、阿彌陀を無量壽又は無量光と譯す。乃ち多數の經には東方阿閦、南方は寶に關する名、西方は阿彌陀、北方は聲音に關する名なり、然るに一字佛頂經・大日經は阿閦を北方、寶に關する名を有せる佛を東方とし、略出經・教王經等金剛頂部の經には北方を不空成就佛とせるなり。金剛界曼荼羅の四佛は略出經・教王經等の名を用ひ、胎藏曼荼羅には大日經の名を用ふれども、北方は大疏の說によりて天鼓雷音と名く。

ジホウショウボサツ　持寶掌菩薩

不空羂索經九の廣大解脫曼拏羅の除蓋障院諸菩薩の直前に說けり。云く、持寶掌菩薩、左手執蓮華臺上寶珠、右手拓ㇾ外揚掌、半跏趺坐と。胎藏曼荼羅地藏院に寶掌菩薩の尊と同異知り難し。胎藏圖像には除蓋障院に寶掌菩薩あり、その像不空羂索經の說に略同じ、胎藏舊圖樣には地藏院と除蓋障院と兩處に寶掌あり、何れも同經の說と相異せり。↓寶掌菩薩。

シホウデンコウホウ　四方電光法

↓四方雷光法。

シホウトク　四法德

常・恒・不變・淨法滿足を云ふ。これ常樂我淨の四德にして、常は常德、恒は樂德、不變は我德、淨法は淨德なり。釋論二云、所ㇾ言不空者已顯ニ法體空無ニ妄故、卽是眞心常恒不變淨法滿足則名ニ不空一。又云、遠ニ離四句相一圓ニ滿四法德一、以ニ此因緣一故、建ニ立相眞如一。

シホウライコウホウ　四方雷光法

四方電光法ともいふ。金光明經卷七如意寶珠品所說の避雷電法なり。四方の雷名を書して所住處に安置すれば、更に雷光の怖あることなく、諸厄諸障あることなしといふ。同品に有ニ陀羅尼一名ニ如意寶珠一、遠ニ離一切災厄一、亦能遮ニ止諸惡雷電一といひ。東方阿揭多・南方設羯嚕・西方主多光・北方蘇多末尼の四方光明電王あることを說き、若有ニ善男子善女人一得ㇾ聞ニ如ㇾ是電王名字一及知ニ方處一者、此人卽便遠ニ離一切怖畏之事一、及諸災橫悉皆消殄。若於ニ住處一書ニ此四方電王名一者於ニ所住處一無ニ雷電怖一、亦無ニ災厄及諸障惱一、非時枉死悉皆遠離と說けるを本據とす。尙口傳草紙所出の虛空藏の眞言を誦ず。此の眞言は種々の供具を四方の電光に捧げ以て避雷を祈る義なり。四方の雷名並に眞言共に金寶鈔四方雷光の條に擧ぐ。（金寶鈔・乳味鈔二十）

ジボク　地墨

無數を示す喩。法華經化城喩品に大通智勝佛の成道久遠を示す時、三千大千世界の大地を墨として千國土を過ぐる每に一塵點を下し遂に此墨を盡すと云ふ喩を示す、これ其典據なり。吽字義云、地墨四牙、山毫三密。

シボサツ　四菩薩

胎藏曼荼羅八葉の四隅に住せる普賢・文殊・觀音・彌勒の四大菩薩を云ふ。又四親近の菩薩を云ふことあり。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com